

池窪弘務作品集5 一九九八年（五十二歳）

トランプの家の迷子たち（戯曲）

登場人物

光子  
平太郎

昭<sup>あきら</sup>

敏子<sup>さちこ</sup>  
幸子<sup>さちこ</sup>  
笑み子<sup>えみこ</sup>

作造

風太郎<sup>ふうたろう</sup>

中年の女の客  
酒屋のご用聞き  
労務者風の男 A B C D E

嵐の夜の、若い女、婆さん、魔女

範子  
妙子

幕は上がっていない。川のせせらぎが聞こえる。  
昭、下手から登場。

昭 この川の音おぼえてる。

小鳥のさえずり。鶯の鳴き声。

昭 自然のハーモニーやなあ。

舞台中央に進む。

昭 確か、このへんやと思うんやど……。行く川の  
流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらずか  
：：。それにしても、二十年か……。月日は、ほ  
んま、飛ぶように過ぎて行くなあ……。見上げ  
る。向こう岸に、ひよいと背中押されたら、川に  
落ちひんかいな思うほど、川の際に、三軒続きの  
長屋があつて、その真ん中の家の二階に、赤い字  
でトランプ占いちゆう、ガクツと片っ方の肩落と  
したような傾いた看板がかかつてた。(間)みん  
な、あの時は、トランプの家に集まった迷子やっ  
たんやろなあ。一時集まつて、ほんで、また、よ  
うけの人に紛れてしもた。

目を閉じ耳を澄ます。

昭 耳を澄ますと、川の音があん時のいろんな人の  
声に聞こえてきよる。まるで、遠い昔から、僕を  
呼んでるようや。

(暗転)

声にならない人のざわめき。バイオリン演歌が小  
さく流れ出す。光子の声。最初は小さく、次第に  
はつきりしてくる。幕があく。  
トランプ占い師光子の仕事場兼居間。中央に二階  
への階段。下手のかまちに敏子。光子が中年の女  
性を占っている。昭、笑子はその後ろで占いの順  
番を待っている。

光子 奥さん、この縁談、あきまへん。

中年の女性 え、あきまへんか。

光子 何にもせんでも、十日もせんうちに潰れます。  
中年の女性 気に入った。はつきり言わはる。他の  
占いみたいに、当たり前障りの無いことしか、言わ

へんのとちごて、ここの先生は、バシと言わはるてきてきたんやけど、ほんまやわ。実は、うちの義理の姉の旦那の、妹のお母さんが、

光子 お宅のお母さん違いますの？

中年の女性 (腰を上げる) まあ、そうも言います。

光子 奥さん。

中年の女性 へえ、他にもなんか？

光子 三百円。

中年の女性 あ、すんまへん。百円、二百円、三百円、ほな、みなさん、どなたはんも、お先に。

(金を畳の上において、下手のかまちから姿を消す。)

平太郎、階段を降りてくる。

光子 お父ちゃん、風邪どうや？

平太郎 ぼちぼちや、のど乾いたよって、水のもと思うて。

光子 後から、玉子酒でもつくったげる。

平太郎 おおきに、そや、テレビで台風くる言うてるで。

光子 さつき、それる言うてたんちがいますの。

平太郎 それが、急に気変わらはったらしい。それにしても、まだ、お客さんようけいたはる。皆さん、こんなむさくるしいところ、ようおいでで、ほんまにおおきに。(たたきに腰掛けている敏子に) お嬢ちゃん、そんなところにおらんと、上にあがり。

敏子 ここでいいです。占うてもらおうのと違いますから。

光子 さつきから、何回も言うたやけど。雨宿りさせてもうてるだけやからて。

下手から、酒屋のご用聞きが入ってくる。

御用聞き えらいこっちゃ、近鉄とまってまっせ。

光子 なんで、まだ、雨が降ってるだけで、風なんか吹いてへんのに？

御用聞き 事前の策言うやつちやいまっか。下手に走らして、なんだあったら、会社の責任や思うて

ますのやろ。石橋叩いて渡るんもええけど、せこ  
おますなあ。嵐の中を疾走する夜汽車。健さんが、  
哀愁を帯びた目で窓の外に目をやっっている。

光子 その目は、どう見ても、秋刀魚を狙うネコの  
目や。

御用聞き あきまへんか、けんはけんでも、刺し身  
のけん。

平太郎 嵐、嵐いうたら、わし、電車の中から、雷、  
ぼん、ぼん、落ちよんのん見たことある。大和の  
三輪さんの縁日からの帰りやった。急に電車が止  
まってしても（間）みなはん、雷いうたら、空に  
ペケペケと光って、ちよつと、間おいて、ドドン  
と思てまっしやる。それは甘い。目の前に落ちる  
やつは、全然違う。真っ白い火柱や。バーン、

光子 あんた、ほんまに風邪ひいてんの。

平太郎 うるさい、いまええとこや。

光子 うるさい……

平太郎 かにん。もうちよつと喋らして。とにかく、  
まっすぐに空気引き裂きよる。そのたんびに、  
キャーと悲鳴が上がる。女は男の胸にしがみつく。  
わしは誰もいてへんから、キャ言うて、手すりに  
しがみつく。

御用聞き ええおっさんがキャでつか。

平太郎 せやかて、怖かってんもん。

御用聞き わしもはよいなな。ほな、醤油一本と、  
菊正一本。それに、空瓶代。（光子に小銭を渡  
す）奥さん、板はらんで大丈夫でつか？

光子 大丈夫、大丈夫。生駒さんが守ってくれはる  
さかい。それに石切さんもいたはる。それに、  
（平太郎を横目で見る）お父ちゃんもそんなとこ  
でぼーとしてんと、はよ寝なさい。自称病人なん  
やろ。

平太郎 自称で……。ほな上がるわ。

御用聞き 下手に退場。平太郎階段を上がりかける。

光子 お父ちゃん。

平太郎 ……（振り返る）

光子 東京、大丈夫やろか？

平太郎 なにが？

光子 何がて、台風やがな。  
平太郎 そんな、近畿にもまだ来てへんのに。  
光子 せやかて、英世が心配で。

平太郎 英世？

光子 自分の子供の名前忘れて、どうしますの。

平太郎 ああ、英世なあ。テレビで東京の様子見てきたるわ。

平太郎 階段を上がっていく。

光子 うちの息子、英世言いますね。子供の頃は、野口英世みたいでいやや、言うてましてんけど、医者のお卵になつてからは、ええ名前やなあなんて、勝手なことを……。

笑子 うち、お医者さんきらい。注射するもん。

光子 大丈夫、うちの英世は注射も上手。全然痛いことない。それに、ほんま、親孝行で、はよ、一人まいの医者になつて、お母さんに楽させるいうんが口癖で、それに、男前。

昭 あのを、

光子 え、

昭 お話中、すみませんけど、本職の方に戻つてもらわれしまへんやろか。台風も来てるそうやし  
光子 分かつてま。

風の音

昭 気のせいかもしれへんけど、ちよつと、吹いて来たみたいや。この家大丈夫やろか？

光子 気にいらんだら、出て行つてもうても、かまへんけど。

昭 そういう意味ちやいます。僕はすぐに思てることとが口にするたちで。気にさわつたら、すみまへん。

光子 英世やつたら、人の気にさわるような事は言わへん。ほな、次の人。

昭 (にじりでる) 僕です。

光子 ちいぢやい女の子、差し置いて、ええ男が、僕ですやなんて、お嬢ちゃんどうぞ、わしは一番後でええて、一言いえんのんかいなあ。英世やつ

たら、

昭 僕、英世と違います。

光子 せやなあ、あんたは、ひでーえよやなあ。

昭 (あとずさりして) 何で他人にこんな事言われ

なあかんのやろ。

光子 お嬢ちゃん、おいで。何処から来たん？

笑子 阿倍野。

光子 えらい遠いところから一人で。

笑子 (頷く)

光子 ほんなら、ここに、占う人の生年月日と、お

名前書いて。

笑子 生年月日しらん。

光子 ほな、お名前は？

笑子 タマちゃん。

光子 猫みたいな名前やな。

笑子 猫や。

(間)

光子 猫かいな。ほんで、オスカメスカ？

笑子 しらん。おぼちゃん、タマおらんようになって

てもてん。うち、心配で。

光子 いつからやのん。

笑子 えええつと、木曜日。

光子 三日前やなあ。

笑子 いっつも、うち、家に帰ったら、ずっとタマ

と遊んでたんや。

光子、トランプをきり始める。

光子 お母さんは？

笑子 お仕事。

光子 お父さんは？

笑子 (下を向いて) ……。

光子 おぼちゃん、アホやなあ、いらんこと聞いて。

ほんで、どんな猫や？

笑子 白と黒。片っぽうの目の回りが黒うて、尻尾

がないねん。西瓜が好きで、お風呂が嫌い。

光子 お風呂に入れた事あるの？

笑子 うん。(泣き声になって) もう、絶対、お風

呂に入れたり、顔に袋かぶせたりせえへんから。  
ひげもひっぱらへん。それに、  
昭 まだあるんかいな。そら、猫も家出したなる。  
光子 うるさい、気が散る。

光子、トランプを並べる。

笑子 学校からかえって電気つけたら、いつも、うちの足にじゃれつくのに……。何処にもおらへんねん。(泣く)お母さんに言うたら、明日一緒にさがそうって。

光子 お母さんと捜したん？

笑子 ううん。お仕事に行かはず。ほんで、うちだけで捜したんや。団地の一階から、八階までの廊下、タマ、タマ。

敏子、たたきから居間に上がり、笑子を見つめる。

昭 タマ、タマ言うたん。その猫はオスやなあ。

敏子 ちやかさんといて、かわいそうやないの。

昭 すんまへん。せやけど、なんでぼろかすに言われなあかんのやろ。帰りとうなってきた。えらいとこ来てもうた。

敏子 八階建ての団地で、猫が迷うてる。みんなおんなじドア。

光子 同じドアでも、その向こうにある生活は、どれ一つとして、同じもんはあらへん。考えたら、不思議なもんや。

笑子 うちが目つむってても分かるよ。私のお家やもん。お母さんと、私のおいがするもん。

(間)

敏子 一人でよう来たね。

笑子 前にお母さんと、石切さんに来た事があるの。

そんな時、川の向こうに、トランプうらないって書いてあるやろ、あその占い、よう当たるんやて、お母さん教えてくれはった。

敏子 台風来る言うてるし、お母さん心配しはらへん？

笑子 タマのおるところを占ってもらいに、石切さんに行きますて、手紙書いてきたから大丈夫です。  
光子 しっかりしてるなあ、お嬢ちゃん。ほんで、この猫、ひろたんと違う？

笑子 うん。公園で。

昭 もろたんや言われたら、どうするんやろ？

敏子 ちやかさんといて、今大事なときやから。

昭 ちやかしてへん。ほんまにそう思ったんや。えらい、商売やなあ。

光子、一心不乱にトランプを切り、並べる動作を繰り返す。昭、敏子、呆然として、光子の手元を見つめる。

敏子 きれい、トランプが生きてるようや。

昭 ほんま、キングやクイーンが踊っているようや。

敏子 (笑子の肩を抱く) きつと見つかるよ、タマ。

笑子 (光子を見て) おばちゃんの顔、こわい。

敏子 こわいことあらへん。あんたの為に、一生懸命占うてくれたはんねんさかい。

光子 ひろた公園にいる。

笑子 何回も搜したけど。

光子 大丈夫、生まれたところに帰るて出てる。

笑子 お母さんは、公園にほかされたんや言うてはった。

光子 お嬢ちゃんが、公園でひろたんやろ。それやったら、そこが生まれたとこや。

昭 大きな公園か？

笑子 ううん、ちっちゃい三角公園。

敏子 うちも一緒に搜したげる。一人で搜して見つからへんだらかわいそや。

光子 うちの占いがあたりへん言いますんか。

敏子 いいや、そんな意味やのうて……。阿倍野は、帰り道になりますから。それに、もう来はらへんやろうし。

光子 誰が？

敏子 いいえ、なんでもあらしません。

笑子、三百円を光子の前におく。

昭 子供は半額ちやいますの？  
光子 占いに、子供も大人もあらへん。せやけど、  
猫やから、百円にまけといたげる。

笑子、立ち上がるうとして、ふらつく。

光子 どないしたん。

笑子 ちよつと、しんどい。タマ……

光子 そら、あかんわ、二階で横になるか、（立ち  
上がり、二階に向かって叫ぶ。）お父ちゃん。

平太郎、階段から顔を出す。

平太郎 なんや。

光子 （笑子の額に手を当てながら）この子、気分  
悪いんやて、下は狭いよって上で寝かしたげよ思  
うやんけど。

平太郎 そらえらいこつちや、わし、寝間ひいたる。  
敏子 うち、抱いて上がります。

光子 そうか、頼むわ。

昭 僕、医者呼びに行きましょか？

光子 熱もないし、顔色もそんな悪ない、暫く様子  
みよ。

敏子、笑子を抱いて階段を上がる。

昭 子供も色々やなあ。憎らしいガキもおるけど。

光子 なに言うてますの、子供は親の鏡やで。

昭 ほんなら、お婆さんの鏡が、英世さんか。

光子 もつたいない。せやけど、兄ちゃん、初めて  
ええこと言うてくれた。英世がうちの鏡やて、ほ  
んま、うれしい事言うてくれる。（二階へ上がる  
うとする）ちよつと様子見てくる。

敏子、階段を降りてくる。

敏子 お婆さん、大丈夫です。あの子、お中すかし  
てるだけです。

敏子の後ろから平太郎が顔を出す。

平太郎 毎日、五十円ずつ、おやつ代もろてるんやて、土曜日は給食ないよって、二百円。猫おらんやうになつてから、うちへこよう思て、金貯めててんやて。そんで、今日は朝食食べたきり。目も回るわな。

光子 かわいそうに、子どもはお中すかしてんのが一番かわいそうや。何にもあらへんけど、おにぎりでも。そや、台風来る言うてるし、それに電車も止まつてるし、(敏子と昭の方を見て) うちらの分も、ご飯あるだけ握つてしまお。

敏子 私は……。

光子 袖振り合うもなんとか、遠慮する事あらへん。昭 僕、梅干しあきまへんね。

光子 はい、はい、何にも入れしまへん。

敏子 うち、手伝います。

光子 え……。(間) そうか、ほんなら、手つどうてもらおか。

平太郎 危ないから、外でたらあかん言われたら、家で猫と遊ぶしかないわなあ。なあ、光子、何処ぞにのらくろみたいな猫おらへんやろか？

光子 のらくろみたいなの人やつたら、心当たりありますけど。

平太郎 ……

光子、敏子、上手に消える。下手から、作造が入ってくる。

作造 何時もやつたら、うるさいくらいにおる鳩、一匹もおらへん。空も、急に夜みたいにくろうなったり、蛍光灯の紐ひっぱったみたいにくろうなと、明かるうなったり、けったいな天気や。ほんで、かだだが湿るような細かい雨が降つとる。

平太郎 こんな天気でも、作やん、石切さん参つてきたんか？

作造 そうや、毎日の、たつた一つの楽しみやもん。下るんも一歩ずつ、上がるんも一歩ずつ、途中で死ぬかもしれへん。

平太郎 そんなことあるかいな。あんたは元気やさかい。それに比べたら、わしはあかん、何時も病

気ばっかりや。

光子（台所からの声）いいや、お父ちゃんは元気やで。

平太郎 何を言うか、この病弱つかまえて。

おにぎりの皿を持って、光子下手より。

光子 この前の、隣のぼやで、長屋でいちばん最初に飛び出したんは、お父ちゃんやさかい。

平太郎 ……。

作造 そやそや、枕抱えて、音川に落ちてんなあ、平さん。

平太郎 熱出てきたみたいや、二階で、寝てるわ。

光子 これ、もって行つたつて。（皿を平太郎の目の前に）ちよつと、お父ちゃん、このおにぎり見て。

平太郎 うまそうやなあ。

光子 どうや、綺麗に同じ大きさの三角おにぎり。

あの娘、にぎつたんやで。上手やろ。おにぎり一つ握るの見てても分かる。苦労してるわ、あの娘。

作造 お客さんか？

平太郎・光子（顔を見合わせて）さあ……。

平太郎 ほな、持っていったるわ。ほんま、ゆっくり病氣もしてられへん。

平太郎、ふらつきながら、階段を上がる。

作造 わしも、暇やなあ。病氣にでもなるか。

光子 がまの油売り、また、やははつたら？

作造 もうじき、八十やで、お光はん。ほんまに手切つてしまふがな。

光子（昭の方を見て）兄ちゃん、ここは、昔、五目長屋言われててなあ、もう一つ同じような長屋が続いてて、石切さんの参道で、いろんな芸や、露店や、占いを生業（なりわい）とする人が住んでて、ほんまに色々混じつた五目ご飯みたいやつたんや。

昭 猿回しもおつたんやろか？

作造 おつた、おつた。せやけど、あの芸は、はじめは面白いけど、段々悲しうなつてくるなあ。

昭 自分が猿回してるんか、猿に回されてるんか。  
作造 いいや、回ってる猿と自分が一緒に見えてく  
るて、あの男よう言うとった。猿が死んだとき、  
あいつ、自分の首に輪っか作って、作やん、この  
ひも持って、わし回して言うて、子供みたいに、  
わあわあ、泣きよった。一人で、猿回しはできへ  
ん。

(間)

わしらは、道ばたが舞台やった。そや、晴舞台や。  
陣中膏の旗をたてて、さあさあ、御用とお急ぎの  
ない方はゆつくりときいておいで、遠目、山越え、  
笠の内、きかざる時は物の文色あいろと道理が判らぬと  
いう。遠くから見たり、人の頭越しに覗いてたん  
じゃ何のことかわからん。さあ、遠慮はいらない  
から遠くの人は近くへ、近くばよつて目でごろう  
じろだ。ただいまよりは陣中膏はがまの油売りの  
始まりだよ。

さあて、お立ち会い

手前、ここに取り出しましたのは、陣中膏は四  
六のガマだ。縁の下や、そんじよそこらにいるガ  
マとはガマが違う。あんなものには薬石効能がな  
い。手前のは常陸の国は関東の霊山、筑波山で獲  
れた四六のガマだ。四六、五六はどこでわかるか。  
前足の指が四本、後足の指が六本。これを名付け  
て鬘は四六のガマ。一年のうち、五月、六月、八  
月、十月に獲れるところから、一名五八十八(ごは  
つそう)の四六のガマとも言う

光子 うまいもんや、ひとつも衰えてへん。

作造 聞いてくれる客がおらんようになっただけや  
ろか？ せやけど、息もきれるわ。

作造、客席の後方を見る。

昔は、石切さんの坂道、走って上がっても、なん  
も、息一つ切れへんだ。せやけど、自分だけが、  
辛い思たらあかん。こんな天気やのに、ようけの  
人がお百度参りしたはる。わしは、もう、お百度  
よう踏まんよつて、(百度紐を取り出す) 皆はん

と同じように、一本一本勘定するんや。あの人の願いかなえたってや、今度はあの人やでえ思て。あんなに、一生懸命参ったはんねんから、きつと、病氣ようなるやろってなあ。：。参ったはる人見ながら、ときどき思う事あんねん。顔がみんなちやうように、生きるんも、死ぬんもそれぞれや。人の一生でなんなんやろ？ 明日にでも分かる気がするんやけど、こんな歳まで生きてきても、なんも、わからへん。

(間)

せやけど、わしが病氣なったら、誰か石切さん参つてくれはるやろか？

光子 立派な息子さんがいたはるやんか。

作造 大きな病院に入れてくれるかもしれへん。立派な葬式だしてくるかも知れへん。せやけど、誰ど石切さん参つてくれるやろか？

光子 うちの方が先に行くかも知れへんけど、うちが参ったげる。お百度踏んだげる。

作造 おおきに、おおきに、わし、石切さんに抱かれて死ぬねん。

舞台が薄暗くなり、風の音。

作造 台風来そうやなあ。ほな、帰るわ。

光子 一人で怖かったら、おいでや、おんなじ長屋やからうちの方が大丈夫や言う事あらへんけど。

人が多いよって、にぎやかや。なんかあつたら、壁たたき、すぐに行つたげるから。

作造 わし、見たいなあ。

光子 何を見たいの？

作造 わしのためにお百度参りしてくれる人を、いつもの石の上に腰下ろして、お百度紐勘定しながら、その人の姿見てたいなあ。

作造、下手に消える。

昭 ほな、うらのうてもらおつと。

光子 それどころやあらへん、台風や、病人やて忙

しいんやから。台風来たら、男手がいるよって。こんな時に英世が居てくれたら、どんなに気丈夫か。さて、うちは、お父ちゃんの玉子酒つくる。そらそうと、東京大丈夫やるか？

光子 上手に、入れ違いに敏子が入ってくる。

敏子 風も強ようになって、雨の音も。それに夜みたいに暗うなつて……。

昭 ほんまに来そうやなあ。えらいこつちや、ほんまにこの家大丈夫やるか？飛ばされたら、川の中や。

敏子 うち、金槌。

昭 僕も、おかあちゃん。

敏子 おかあちゃん……

昭 なんか、家が揺れだした。

光子、上手から登場。

光子 心配せんでええ、そよ風でも、うちの家は揺れるんやから。

昭 台風やったら、飛んで行くんちやいまつか。まだ、死にとうない。

光子 たいそな子やなあ。大きく揺れるだけで倒れへん。うちの家は柳と一緒。

二階から、バイオリンの音。

光子 珍しいなあ、お父ちゃんがバイオリン引くやんて。

昭 ええ音やなあ、途切れそうで、途切れへん。

光子 大正バイオリン。なんで、大正バイオリン言うんやろなあ。

敏子 風に乗って聞こえてくるようや。

暗転。上手にスポットが当たる。バイオリンを弾く平太郎。横にすわって聞く笑子。

平太郎 ハハ、のんきだね！

のんきな父さんお馬の稽古  
馬が走り始めたらとまらない

子どもは面白そうに父さんどこへゆく  
どこに行くのかお馬にきいとくれ  
ハハ、のんきだね

笑子 (拍手しながら笑う)

平太郎 のんきな父さんの坊やが裸で

かあちゃんが着物を着よと叱っても

坊やはイヤダと言って着物を着ない

「ちよいと父さん坊やが裸で困りますわよ、なんだ

なんだ……」

坊やが風をひいたらどうするんだ

出て来た父さんも丸裸

ハハ、のんきだね

光子、スポットに入ってくる。

笑子 おじちゃん、もう一回、もう一回。

光子 お父ちゃんえらいもててるやん。

平太郎 まとわりついて、離れへんねん。どや、わ  
しでも猫よりましやろ。

光子 お嬢ちゃん、もう、しんどない？

笑子 (頷く)

平太郎 大丈夫やなあ。おにぎり、三つも食べたよ  
って。

笑子 おいしかった。

光子 そらよかった。お父ちゃんの玉子酒できたで。

お嬢ちゃんも下行こ。二階はよう揺れるし、それ  
に、サイダーあるよって。

笑子、大きく頷く。光子、スポットから消える。

元の舞台に戻り、平太郎、階段を降りてくる。

平太郎 みんな、退屈してへんか思て、一曲、歌  
いにきたで。

平太郎、バイオリンを弾きながら歌う。

平太郎 おれは河原の 枯れすすき

同じお前も 枯れすすき

どうせ二人は この世では

花の咲かない 枯れすすき

敏子 死ぬも生きるも ねえおまえ

水の流れに 何変わる

おれもお前も 利根川の

船の船頭で 暮そうよ

平太郎 なんや、遠い昔に帰っていくようや。

敏子 お父さんがお酒飲んだら、よう歌うた。

壁を叩く音。

平太郎 (壁に耳をつける) どないしたん、作やん。  
チャンチキおけさ、うとてくれてか？ ほんなら、  
こっちゃおいで、そこやったら、よう、聞こえへ  
んやろ。(壁に耳をつける) ここで、聞きたいや  
て、難儀やなあ。月があ、あ、あ、あかん、もう  
声でえへんわ。又、今度な作やん。

壁を激しく叩く音。

平太郎 怒つて、壁蹴つとる。わがままやなあ、  
作やん。そんなんするんやったらもう、作やんに  
うとたらへんで。

壁の音、ピタツと止まる。

平太郎 子供みたいやなあ。作やん、チャンチキお  
けさ、昔から、好きやったなあ。せやけど、この  
歌バイオリンで弾くの難しいんやで、すぐに弦で  
顔弾いてしまうねん。

光子、上手から登場。

光子 お父ちゃんか歌うやなんて珍しい事や。バイ  
オリン演歌があかんようになってから、急に、働  
く気なくしてしてもて……。ちよつとでも、働く気  
になつてくれはったら、うちも楽なんやけど。

平太郎 せやかつて、わし、これしかでけんもん。

光子 ……。(ふっきるように) さあ、玉子酒出来

たで、兄ちゃんもついでやさかい、一杯よばれて。

昭 僕、玉子酒は……。

光子 あんたのは玉子なし。

昭 そうですか、ほな、ちよつとだけ。  
光子 そや、サイダー忘れたわ。お嬢ちゃん、台所の流しの上に置いたんねん、持ってきてくれる。笑子 はーい。

笑子、上手に走って行く。昭、酒を一口飲む。

昭 台風がなんやねん。なあ、おばはん。

光子 おばはん？

平太郎 えらい酒癖がわるそうや。

光子 わるいて、いま一口飲んだとこや。

昭 一口飲んで、回ったら、悪いんか。国会で決まったんか。それに占いなんかほんまに当たるんかいな。ランプ切って、僕の人生分かるなら、僕の人生七並べつと、（光子を見て）あんたの人生、僕ばあ抜き。（敏子の方を見て）ねえちゃん、僕とデートせえへん。

敏子 いやよ、酒のみ。

停電。舞台真っ暗になる。

敏子 きや、いやらしい。

光子 やめなはれ、兄ちゃん。

電気つく。平太郎、敏子の背後から、胸に手を回している。平太郎、客席の方を見て、ニヤリ。

光子 お父ちゃん。

（暗転）

昭 風、やんだなあ。台風行ってしもたんやろか？

平太郎 そんなことあらへん。テレビで、ほん近くまできてるで。嵐の前の静けさや。

昭 ちよつと、表見てこう。誰のかしらんけど、傘借りまっせ。

平太郎 わしも行く。

光子 病人がうろついてどうしますの？

平太郎 風邪なおった。

光子 あかん、あかん。病弱なんやろ、お父ちゃん。

笑子 お兄ちゃん、私も行く。

光子 遠くへ行ったらあかん、近くにおりや。

平太郎 なんや、自分の子供に言うてるよやなあ。

光子 そない聞こえますか？お父さん、あの二人、ここから見てたら兄妹みたいやなあ。

平太郎 そうか、そう言うたら、そう見えるなあ。あかの他人には見えへん。

昭と笑子下手へ。昭、傘をさす。敏子、光子と平太郎の横に座る。3人が話し始めるが、客席には聞こえない。

昭 水の流れが、えらい速いなあ。

笑子 うん。

昭 あんまり覗き込んだら危ないで。

笑子 うん。

昭 タマ、見つかったらええのになあ。

笑子 うん。

昭 うんとしかいわへんのんか？兄ちゃんが、男

前やから、あがつてるんか？

笑子 ちがう！

昭 こらっ

笑子、笑いながら駆け出す。昭、笑子に傘を差しかけながら、笑子を追って、下手に消える。

光子 中学を卒業してから、弟さんと二人で、よう頑張ったんやね。

敏子 人にかわいそうやなあ言われのが嫌やった。変な同情がいちばん辛い。その人と初めておうたんは、雨が冷たい日やった。お醤油こうたんです。一升瓶でこうた方が安いよって、それと、買い物持って、ヨタヨタしてたら、「お客さん、わしが家まで持っていったるわ」いう声をして、後ろ向いたら、自転車に跨って、真っ赤な傘の下で、真っ白な歯して、照れたようにわろたはった。

平太郎 真っ赤な傘に、真っ白な歯。なんか他人みたいな気せえへんな。あいつ、歯だけはよかったなあ。

光子 その人は酒屋に勤めたはったん。

敏子 ええ。

平太郎 酒屋なあ……。

敏子 そんなで、うちにもよう遊びに来はって。弟もなついで。せやけど、ふっと来はらんようになって。ほんまに、風みたいな人やと

平太郎 風……。(絶句)

敏子 今度おうたんは、パチンコ屋で……。父親代わりに働いて、母親代わりに家事をして、ふうと、しんどうなつて、ふらっと、初めてパチンコ屋には入ったんです。

平太郎 パチンコ屋なあ。

光子 そこで働いてたん？

敏子 ええ、ここでやり言うて、一杯玉だしてる人のかせて。

光子 えらいことするなあ。

平太郎 ああ、間違いないわ。たたりやでこれは。

敏子 それだけ違います。ガラス開けて、777揃うまで玉入れてくれはった。うち、(間)勝ったんです。

光子 あたりまえやがな。

平太郎 それが原因で店長ともめて、店長の首締めて、パチンコ屋くびになつたんやなあ。

光子 誰の話ですか。

平太郎 ……。

敏子 その人、英世という名前と違います。

光子 ……。

平太郎 (立ち上がりかけて) 東京の方はどうやろ、テレビで見てもうか？

光子 (平太郎の服をひっぱり座らせる) 座ってなさい。

敏子 うちが風邪引いて寝込んだときは、三日三晩、寝んと看病してくれはりました。

平太郎 病人には優しいところがあるんやなあ。それが、たった一つあいつのええところや。

敏子 そのかわり、疲れて、一週間寝こまはったけど。

平太郎 ……。

敏子 この春、弟に嫁さんがきました。うち、うれしゅうて、肩の荷がおりましたような氣して。おばさ

ん、うち小姑。

光子 よかつたなあ、苦勞が報われた。

敏子 ええ娘なんですよ、ほんまに。せやけど、うちの場所がのうなつてしもて。会社でも、もう、十年。みんな結婚して行くのに、うちだけが残つてしもて。男の人も、陰で、うちのこと番茶もでがらしつて。

光子 見る目がないんや、その人らに。あんたは綺麗で。

平太郎 せやけど、家にも、会社にもおりにくいからいうて、なんぼなんでもあんなんと……。

敏子 何が辛いいうても、家がないのが一番辛い。今まで張りつめていたもんが、ぷっちんと切れて……。辛い時、淋しい時、うちの背中をそつと叩いてくれる風みたいな人、その温もりがうれしゆうて、（そつと、敏子目頭を押さえる）おぼさん、人を好きになるのに理由いりませう？

光子 （平太郎を見る）いいや、そんなことあらへん。

平太郎 （くしやみをする）誰かわしの事言うてるんやろか？

敏子 確かに、あの人は、顔も悪い、口も悪い、お金もない、頭も悪い、

光子 なんにも、そんなぼろくそにいわんでも……敏子 酒屋にいたはつた頃、忘れられへん事があります。戸をガラツと開けてはいつて来はつた。うちは弟と朝ご飯食べてました。おかずがなく、少しずつご飯にお醤油かけて……。うち、急いでお膳を体でかくした。あの人は、それを見て見んふりしてくれはつた。ええ天気や、キャッチボールしよういわはつた。弟と3人思いきり走つて、思い切りわろて、あの時が、うちの青春。

昭、笑子、下手から

昭 なんか、又、雲行きがおかしいなつてきたで。

笑子 雲が、飛行機みたいにビュンビュン飛んで行く。

昭 雨もきつなつてきた。はよ、家にはいろ。  
笑子 川の所に誰かいる。

昭 えらいこっちゃ、あの人、川に飛び込むつもりや。あっ、ガマのおっちゃんが、女の人とめはった。

風の音、雨の音。

昭 はよ家に入り、俺も助けに行く。

笑子 家にかけて込む。息を切らして、暫く声もでない。

光子 どないしたん、えらい息切らして。

笑子 川に女の人が、ほんで、ガマがつかまえて、兄ちゃんが走って行ってん。

平太郎 なんのこっちゃ。

作造 と昭に抱えられるようにして幸子、下手より登場。作造、ガマの油売りの衣装。

笑子 (作造を見て) おじちゃん、かっこいい。

作造、正面向いて、Vサイン。

幸子 飛びこもなんて思てしません。川を見てただけです。

作造 あんなに覗きこまな見えへんか？

幸子 うちは、トランプ占いの家をさがしてただけです。

昭 ここやがな。

幸子 え、川の中に看板あるって聞いたさかい。

作造 誰がそんなええ加減なことを。せやけど、晴れた日は、あそこから川覗いたら、おまはんとこの看板、水に映って見えるときある。

平太郎 ようしつとるなあ、そいつ。

敏子 どんな人に聞かはったん？

幸子 枯れ木みたいに痩せた人で、風よ吹け、嵐よ来たれ、せやけど、我は動かん。

平太郎 分けのわからん事言うてたんやな。来たで、第二室戸や、えらいこっちゃ。

光子 風太郎、風太郎が帰ってきたんやろか。

敏子 約束守ってくれはった、風太郎さん。

激しい風の音、揺れる家。

光子 とにかく、はよ上がり。その娘ビショ濡れやんか。体ふかな、風邪引く。はよ、はよ、うちのであわへんやろけど、風呂場で着替え。

幸子 その前に、占うて下さい。

光子 占いより……。

幸子、光子を見つめる。

光子 分かった、占いましょ。せやけど、うちの言う事も聞き、あんたは、風呂場で着替え、うちは、あんたの声聞こえるところでランプを切る。ええな。

幸子、光子に促されて上手に消える。物が倒れる音。

笑子 怖い。

平太郎 大丈夫や、みんな、こっちや集まり。作やんも。(作造を見て)せやけど、作やん、えらい格好やなあ。

作造 一人で、こわかってん。

平太郎 そうか、そうか、台風で怪我したら、あんなのガマの油一つもおか。

作造 おおきに、平やん。十年ぶりにしとつ売れる。はよ、怪我してや。

幸子、下手から飛び出して来る。その後ろから、光子。

光子 その娘つかまえて。

敏子、幸子の前に立ちふさがる。

敏子 出て行っても、どこへも行かれへんよ。

幸子 行かせてお願い。お百度踏ませて。

光子 トランプがあかんだら、お百度か。何をして

も、あかんもんはあかん。二人の間には、どうにもならへん川がある。

幸子 あの人、急に別れよ言わはった。腕組んであるいたこともあらへんのに、この人と一緒になるんやてうち心に決めてた。別れる理由言うてくれへんだら、うち、死ぬ言うた。

激しい風の音。電球が揺れる。平太郎にしがみつ  
く笑子。

幸子 嫌いになつてん、あの人言わはった。嘘や、嘘や、本当の事言うてくれへんだら、屋上から飛び降りる。(間)そしたら、僕の誕生日覚えてるかって。昭和二十年、八月七日。生まれたところに、僕は生まれたんや。今までなんともなかったから、大丈夫や思ってたんや……

光子 親御さんはご存知か？

幸子 まだ、言うてへん。

光子 親は、そんな人と結婚さすためにあんたを育てたんとちがう。

幸子 そんな人……。なんで、おばさんに、そんな事言われなあかんの。

平太郎 謝り、光子。

敏子 おばさん、ひどい。

光子 ひどいかもしれへん、せやけどそれが世間や。思っても、口にださへんだけや。きれいごとばかりで通りますか。愛や恋や、人の事やから、そんなうわつらな事を言うんや。あんたは自分の幸せ考えなあかん。親泣かしてどうする。あんたは、映画やテレビの主人公やあらへん。まわりも違う。うちとおんなじような世間や。越えるんやったら、先ず、うちを越えて行き。しょうもないトランプ占いのばあさんを、よまいごとや、しょうもない言うて、まず、越えて行き。

光子、行こうとする幸子の手をつかむ。

光子 行ったらあかん。今は、あんたの中で吹き荒れてる嵐をじっと見つめなあかん。嵐が過ぎるま

でここにおり、なあ。この家には、ようけの迷子が来る。道にまよて、家探して、ぼろぼろになつてる子もいる。他人からみたら、しょうもない事でも、その子には死ぬほどの事もある。せやけど、誰もその子になつてあげられへんのや。うちは、学も徳もない。先生みたいに正しい道なんかよう教えんし、分からへん。うちにできるんは、トランプ切つて占うて、その後は、手をつないで、ほんのいつとき一時、迷子と一緒に迷うことだけなんや。手を振り切ろうとして、幸子、光子の顔を見る。

幸子 おばさん、泣いてる。

光子 手を離す。

幸子 おばさん、泣いてくれるの？

光子 あほやなああんた、人の事でいちいち泣いたら、涙がなんぼあつても足りひん。

激しく、家が揺れる。

光子 みんな、ここに集まり、この柱が一番太い。

光子を真ん中に、幸子、敏子。平太郎を真ん中に、笑子、作造。幸子と光子の間に入ろうとする昭。

光子 兄ちゃんは、戸を押さえとつて。

しぶしぶ戸を押さえに行く昭。

敏子 お母さん。

光子 え？

敏子 お父さんが亡くなった時、みーんな帰ってしもた位牌の前で、お母さんが、うちら姉弟を抱きしめはった。あの時のお母さんのおいと一緒や。長い間忘れてた。

光子、敏子の髪をそつと撫でる。観客席から、風太郎登場。

風太郎　ウララ、ウララ、ウラ、ウラ、ウララ、ウラの  
ウラはオモテなの、ウラナイ、ウラナイ、ウラナイ、ウラナ  
イヨ、ハッー、ウラナイ、ウラナイ、アタラナイ、  
ハッー

風太郎、舞台に駆け上がる。

昭　こら、一生懸命、戸押さえてんのに、そんなと  
こから入ってくるな。そこ、壁やで。

風太郎　何をごちゃごちゃ言うてるんや。わいの家  
やどこからはいろと勝手やないけえ。

昭　すんまへん。

風太郎　ほんま、いつ出るんか、いつ出るんかて、  
氣いもたせたけんど、やつと、主人公登場や。

敏子　風太郎さん。

風太郎　なんや、敏子はん、こんなとこで何してん  
の？

敏子　何してんのんて、そんなことよう言わはる。  
ここで待っとけ言わはったん、風太郎さんやない  
の。

風太郎　ああそうか、せやから、わし、家に帰って  
きたんか。おう、ばばあ、元氣か？

光子　親に向こうて、なんて言い方や。

風太郎　ほんなら、母上元氣で御座るか？　お猿の  
お尻は真っ赤かで御座る。

平太郎　なんで、こんなはんばもんできたんやろ。

風太郎　おう、まだ、生きとったんか。

平太郎　風邪ひいてんねん。病人には優しいんやろ。  
あ、そうか、そらよかった。

平太郎　かわいそうや思ってくれへんのか？

風太郎　とりついた病氣の方がかわいそや。

平太郎　……。

風太郎　相変わらず、きつたない家やなあ。敏子は  
ん、よう見ときや、これがわしの家や。チマチマ  
して、人情や何や言うてるけど、単なる貧乏人や。  
自分慰めとうるだけや。

平太郎　その貧乏人に大きしてもうたん誰や。

風太郎　なんやと。

平太郎　かんにん。

風太郎　むつかしいこと言うな。（作造を見る）せ  
やけど、おもしろい格好しとるなあ、どうしたん、  
おっちゃん。  
作造　ガマの油売りの正装やがな、風ちゃん、忘れ  
たんかいな。  
風太郎　そう言うたら、昔、そんな格好して、いち  
びってたなあ。  
作造　いちびってた……。  
風太郎　いちびってても、暮らせる世の中やってん。  
作造　そうかもしれへん。  
光子　何を感じしてんの作造さん。風太郎も、そん  
なところにおらんと、家に上がり。  
風太郎　ここでええ。

風太郎座り込む。風の音。風に戸とともに押され  
る昭。女達の悲鳴。明かりが一瞬暗くなり、戻る。

風太郎　静かやなあ。遠くで虫の声が聞こえる。

平太郎　チンチロチンチロチンチロリン。

作造　そんな聞こえるか？

光子　いちびってますねんがな。

作造　なんやいちびってんのんかいな。わしアホや  
さかい、いちびるんやったら、いちびる言うても  
らわんと。

風太郎　最初に勤めたんが酒屋やった。

平太郎　お前、酒好きやよって。

風太郎　親父と一緒に、小学校からのんどったもん  
なあ。

平太郎　酒癖悪かった。

風太郎　酒屋やったら、なんぼでも飲める思たんや  
けど。

瓦が飛んでくる。それを片手で避ける。

平太郎　お前、家の中におるんか？それとも、そこ、  
外か？

風太郎　喉乾いたよって、缶ビール一本飲んだら、  
盗人や言われた。腹立って、店の酒やビールや醬  
油、みんな割ったった。気持ちよかったなあ、す  
っとした。

平太郎 それから、パチンコやか？

風太郎 パチンコは好きやけど、自分が出来へんのおもろない。店長と喧嘩して、パチンコ玉床にまいたった。みんな、コロコロ滑りよって、面白かったなあ。ほんで、次はお父ちゃん何やったかいなあ？

平太郎 お前のことやから、映画館か？ コジラ好きやったよって。

風太郎 何を言うてるんや、わしの好きなんは、片岡知恵蔵や。ある時は片目の運転手、そして、その実体は

平太郎 正義と真実の人、藤村泰造。バンバン。ほんで、映画館は何でやめたん？

風太郎 ちゃうちゃう、映画館と違う。かつてにわしの人生つくるな親父。次はストリップや。

平太郎 ちよつとは、大人になったんやなあ。せやけど、それええなあ。わし、一生のうちいつぺんでもええから、布施の晃生ショウのかぶりつきでストリップ見てみたい。

作造 わしは、相撲を升席で見てみたい。

昭 僕は、すき焼きを一人だけで食べてみたい。

平太郎 みんな、男の夢やなあ。

風太郎 ほんま、ささやかな夢やなあ。まあ、年寄りほええとして、お前どさくさに紛れて何言うた。若いもんが、すき焼きを一人だけで食べてみたいやて。

作造 せやけど、いつかは出来ると思てるうちに、年取っていくもんやで。そんなもんやで。

突風、風太郎、下手の端まで飛ばされる。突風逆向き。オットット、けんけんで又、舞台中央。

風太郎 ストリップも、切符もぎってたら、何もおもろない。

平太郎 ほんで、次は何や？

風太郎 もう、人に使われるんは、止めや。もつと、大きな事やったる。

婆さんが飛んでくる。風太郎、無視。若い女が飛んでくる。風太郎、片手で受けとめる。もがく女。

看板が飛んでくる。風太郎の頭にあたる。女を離す。女、飛んで行く。洗濯板が飛んでくる。下着が飛んでくる。掴んで、頭にかぶる。箒に乗った魔女が、飛んで行く。

風太郎 いろんなもんが飛んで行きよるなあ。あつ、石切さんが飛んで行く。

作造 そんな、神さんが見えるんかいな。せやけど、ほんまに飛んで行ってしまはったらどないしよ。

風太郎 あれ、歌うとたはる。

敏子 いしきり、いしきり、いしきりですか！

平太郎 もう、大体見抜かれとるなあ。

風太郎 アッ、プレイバック、プレイバック、アッ

ハッン……

昭 時代が、ちよつとずれてんのちやいますか？

風太郎 ずれてんのはお前の顔じゃ。

風太郎、風に卷かれるように踊る。

風太郎 愛して、ハァー

夢見て、ハァー

恋して、ウー

光子 風太郎、中入り。そんなところにおったら、危ないがな。

風太郎 台風なんか、怖いことあるかい。貧乏の方がよっぽど怖いわ。こんな家、潰れてもうた方が、せいせいするわい。もう、チマチマ生きるんがいやじゃ。なんか言うたら、石切さん、石切さん言うとるけど、がきの頃、お前やったら、怒られへんさかい言うて、さい銭拾いに行かしたんは誰や。

光子 ちよつと、借りた事はある。

昭 弟か兄貴かしらんけど、英世さんとはえらい違いや。

風太郎 誰の話しや、わいには兄弟なんかおるか。それとも、おかあちゃん、わしの留守中に生んだん？

昭 何や、嘘かいな。そら、僕らは、かど通る人みたいやから嘘ついてても、ばれへんわなあ。

作造 嘘言うたら、風ちゃん、あんたも人の事言われへん。つい、最近まで、孫の通信簿見るまで、

ずーと1が一番ええ思ってた。

平太郎 ええ、そうと違うの。

作造 べった。一番ええのは5や、うちの孫なんかみんな5やで。

平太郎 光子、お前知ってたんか？

光子 喜んでるんやから、水さす事もない思て。せやけど、本人見て、分からしませんか？

平太郎 ……。

風太郎 そや、いつまでも台風と遊んでられへん。家に入る。

風太郎、戸から、風に飛ばされるように家に飛び込んでくる。昭、ひっくり返る。

風太郎 お父ちゃん、いや、お父上。お母ちゃん、いや、母上。

平太郎 なんかたくらんどるでこれは……。

光子 お金やったら、ないで。お前、貧乏人、貧乏人ってせんど言うたやないか。そんな貧乏人からお金持っていく事ないやろ。

風太郎 言うたな、くそばばあ。

光子 母上から、くそばばあか、なさけない、なさけない。(目頭を押さえる)

敏子 お母さん泣かしたらあかん。うちら孝行しとうても、いてへんのよ。

風太郎、腕組をして目を閉じる。

敏子 謝って、風太郎さん。

風太郎 (おもむろに目を開けて) ごめんな、くそばばあ。

平太郎 まだ言うとするがな。

敏子 うち、考えなおそかなあ、もうちよつとええのがあたりそうな気がする。

風太郎 借りた金は、百倍にでも、千倍にでもして返したる。これが証拠や。

風太郎、ポケットから、地図を取り出す。

平太郎 汚い地図やなあ。あっちゃこっちゃ虫食い

の穴あいとるやん。  
風太郎 国定忠治の財宝のありかの地図じゃ、驚いたか貧乏人。

作造 国定忠治で、そんな金持ちやったん。

風太郎 財宝のありかの地図あるんやから、そうちがう？ おっちゃん。

光子 なんか頼りない話しやなあ。

風太郎 どっちにしろ、目指すは赤城山や。

光子 お前、その地図、どっちが北か分かるか？

風太郎 ……。

光子 せめて、地図の勉強してから行ったらどうや。

風太郎 そんなことしてたら、人に先越されるがな。

日の上の方が東や、それさえ分かったらええ。

平太郎 地図で日の上の方分かるか？

風太郎 (地図をじつと見る)

光子 月はどっちから上がるんや？

風太郎 ……。むつかしい事言うな。わしは行く

んや、生駒山に。

平太郎 赤城山ちやうの？

風太郎 まあええから、とにかく行かして。

敏子 うち、なにきたんやろ？

風太郎 金借りよと思たから、そんな時の質札。

敏子 うち、質札？

光子 あんな事、口では言うとするけど、年寄り残し

とくのが心配で、嫁さん見せがてら、帰ってきたんやろ。

平太郎 そうでも思わな、救われへんなあ。

風太郎、六方を踏む。

風太郎 さあ、行くでえ、帰ってこられへん旅かもしれん。せやけど、行かなきゃならぬ荒海の、女、乗せない宝船、石切神社の剣つるぎを背おて、いざいざいざ、いいいざあ。

風太郎、戸口に走る。昭を見て。

風太郎 お前も、すき焼き一人で食べられるように頑張れよ。

昭 ありもせえへん宝もんより、すき焼きの方が旨

いわい。

風太郎 あるかあらへんか、行ってみなわからへん。おっ、忠治が呼んでる、風の音に混じって俺にははっきり聞こえる。はよこんかい、何しとるんや言うてる。

風太郎、戸をつき開け飛び出し、下手に消える。

平太郎 行ってまいよった。体に気いつけやの一言もなかったなあ、光子。

光子 情けないけど、しやない。カスでも、うちらの子やねんさかい誰にも文句いえへん。せやけど、行ってしもたら、何やスカみたいやなあ。

敏子 うちらは、風の忘れ物みたい。何しに、ここへ来たんやろ。

昭 そういうたら、質札言うてましたなあ。

光子 これ、結構傷ついてんのに念押しせんでもよろしやろ。

敏子 ええねん、出がらしから質札やもん。

作造 風ちゃんは、照れ屋から思てることよういわんだけや、ほんまはええ子なんやで。

平太郎 おおきに作やん、風太郎が万引きしたときも、あんた近所の人に言うてくれたんやてなあ、風ちゃんは悪ない、あの家が貧乏が悪いんやて。

あん時は、家に火いつけたるか思たけど、よう考えたら、うちも一緒に燃える。

光子 作造さんの言うことが正しい。子どもは悪ない親が悪いんや。

平太郎 せやけど、今度の宝探しも一人か。ほんま、しようもない奴やけど、徒党を組むのが嫌いで、やるときはいつも一人や、それがあいつのたった一つええとこや。

労働者風の男、A、B、C、D、E、下手から登場

A 大将、行きまひよか。ありや、居てへんがな。作造 徒党組くんどるがな。

平太郎 いつの間にか、徒党組むような情けない奴になっつてんなあ。せやけど、あいつは、まだいっ

ペンも、警察のやっかいになった事はない、それが、あいつのたった一つの……

光子 お父ちゃん。

B おらんようになつたら、困ることよ。わい、まだうるん一杯しかくわしてもうてへんがな。

C 国定忠治言うとったなあ。(作造を見て)おっさん、ええかっこしてるやん、芝居しよ。

作造 子分はいややで。

D しゃない、忠治やり。

作造、舞台中央に立つ。A―E作造の周りに膝ま  
ずく。

作造 さあて、お立ち会い

手前、ここに取り出しましたのは、陣中膏は四六のガマだ。縁の下や、そんじよそこらにいるガマとはガマが違う。あんなものには薬石効能がない。手前のは常陸の国は関東の霊山、筑波山で獲れた四六のガマだ。四六、五六はどこでわかるか。前足の指が四本、後足の指が六本。これを名付けて、藁は四六のガマ。一年のうち、五月、六月、八月、十月に獲れるところから、一名五八十(ごはっそう)の四六のガマとも言う

E なにが、さあて、おたちあいや、おっさん、忠治やで、国定忠治。

作造 わし、これしかできへんもん。

風の音。

平太郎 なんや、又、風がきつうなってきたみたいや。

風太郎、飛び込んでくる。

風太郎 どしたんみんな、お百度石のところで待って  
いてくれ、言うたやろ。

A 風や雨がきつうて。

風太郎 なに言うてるんや、赤城山はもつときびしいで、さあ、行った、行った。

A これで、日当が千円やて、きついなあ。

風太郎 三食ついとる。

B わし、まだ、うろんしかたべさしてもうてへん。  
幸子 私も、お百度石のどこまで連れて行って下さい。

風太郎 突然物言うな、びつくりするやないけ。

幸子 嵐の中で、あの人のためにお百度踏ませて。

光子 よつしや、分かった。一回だけまわつといで。  
石切さんは百回まわられていやらへん。一回でもかまへん。

昭 僕もついて行く。風よけぐらいにはなるやろ。

風太郎 何のこっちゃしらんけど、先行って。わしも後から、お百度石の頭撫でに行くよって。

平太郎 まちごても、さい銭盗むなよ。

風太郎 分かつてるわい、昔の俺とちやうわい。

飛び出す、昭と幸子。風に戻される二人。

昭 手、つなご。

幸子 え、はい。

昭 不思議やなあ、何処の誰ともしらんのに、手つないで神さん参るやて。

昭と幸子、下手に消える。舞台中央で、もじ、もじする風太郎。

光子 どうしたんや、風太郎

風太郎 忘れもんや、敏子はん、これ（手紙を片手で顔を背けたまま突き出す）

敏子 何？

風太郎 手紙や、わいが生まれて初めて書いた手紙や。さあ、行くで。みんな、バイバイや。

風太郎と仲間、一列になって、戸に向かって走る。Bだけ上手に走る。思いつきり端まで走ってUターン。そして、戸を突き抜け、下手に消える。

光子 なんて書いたんのん？

敏子 雨に濡れて読みにくい。えーと、としよりをよろしうたのんまって

平太郎 ちよつとは親の事考えてくれてんねんなあ。

光子 あれなりに世の中でもまれてんねんやろう。  
敏子 まだ、書いてある。

光子 なんて？

敏子 (胸に手紙を押しつけて) 雨で流れてしもた。

光子 嘘や、読めたんやろ。

作造 わし、見えたで、言うたるか。

敏子 いや、言うたらあかん。

作造 ほんなら、自分で言い。

(間)

敏子 すきやって、ひらがな三つ。

激しい風の音、そして、暗転。

川のせせらぎ。小鳥のさえざり。鶯の鳴き声。舞台やや上手に昭。

昭 あれから、すき焼き一人で食べてみたけど、ひとつも美味しいなかった。すき焼きは、人と肉を争うて食べて、はじめて、美味しいもんかもしれへん。

昭、上手に歩く。

昭 あの二人、結婚したんやろか？

昭、川をのぞき込む。

昭 猫は見つかったんやろか？ (間) 何んも、分からへん。分かるすべもあらへん。(間) しらんもんどうしが神さん参り。(掌を見る) まだ、あの娘の掌の温もりが残っているようや。

憲子、妙子の手を引いて下手より登場。

憲子 ほんまに、お父ちゃん何処へ行ってしもたんやろ。ちよっと目はなしたら、おらんようになつてしてもて、ほんまに、もう。

妙子 喉、乾いた。

憲子 しゃない、(財布から小銭をだして妙子に渡

す）そこの自動販売機で、ジュースこうといで、おかあちゃんのものもこうときて。

妙子 お父ちゃんのは？

憲子 いらん。

妙子、下手に去る。

憲子 久しぶりに、お父ちゃんの玉造の実家によつて、妙子のお尻にでんぼができて困ってる言うたら、お義母さんが、そら石切さんや、石切さんや、でんぼの神さんや言いださはって、ええかげんにあしろてたら、帰り道やないの、私の孫になんか恨みでもあんのん言いださはるしまつ。たまにしあわへんねんから、言うとおりにしたげんのも親孝行、しゃない。

妙子、ジュースを持って、下手から登場。憲子ベシチに腰を下ろす。

憲子 あんたも、座り。ああ、そうやなあ、お尻いたかつてんなあ。ほんなら、立って飲み。

二人、ジュースを飲む。

憲子 桜、綺麗なあ。ほんまに、春爛漫……。せやけど、緑の多い、ええとこやなあ。大阪のほん近くに、こんなとこあるて、うち、しらんだ。それに、神さん参りやて、日頃、何にも信心してへんけど、わりに、気持ちの、ええもんやなあ。

妙子 あっ、お父ちゃんや。

昭、振り向く

昭 何や、お前らか。

憲子 何ややて、参道から、ふっと、おらんようにならんやから。

昭 二十年前、ここで占うてもうたことあんねん。

屁踏んだみたいな会社の先輩がおつて、

憲子 どんな先輩やろ。

昭 見合いしたんはええけど、どないしよ、どない

しよて、迷てるさかい、玉造のお母ちゃんがよう  
当たると言うてる石切さんに行つて、聞いてきたる  
さかい言うて、来たんや。その時、ついでに、え  
え言うてんのにわしの手相を見てくれた。(憲子  
の顔をじつと見る)

憲子 何やの、気色悪い。

昭 べつびんさんの嫁さんもらう言わはった。

憲子 当たってますがな。

昭 かわいい子供に恵まれる。

妙子 その占い、ものすごうよう当たるね、お父ち  
ゃん。

昭 幸せな親子やなあ。それに、こんな事も言うて  
た、上の人に可愛がつてもうて出世も早い。

憲子・妙子 それは、外れや。

(間)

昭 ほんま、あたりへんだなあ。先輩は、あかん言  
われた人と結ばれて、子供が三人、幸せにしたは  
る。それに比べて、わしは、上司に可愛がられる  
どころか、とことん嫌われて、いまだに平社員。  
それに……。

憲子 ……。

昭 いまさら言うてもしやあない、ほな、行こか。

(妙子のお尻を叩く)

妙子 痛い、お父ちゃんが、でんぼたたいた。うあ  
ああああ。

昭 かんんにん、かんんにん、わしらここにおんのん、  
お前のでんぼのせいやってんなあ

妙子 痛い、うあああ。

昭 謝ってるやないか、もう、泣き止み、でんぼみ  
たいな顔して。

妙子 おお父ちゃん、でんぼみたいな顔言うた、う  
ああああああああ。

憲子 でんぼに顔ありますん？この子がでんぼやっ  
たら、あんたは、でんぼの親か。

昭 ……。さあ、泣き止んで、はよ、石切さん参ろ。

三人が肩を並べて歩き始める。三人をスポットラ

イトが照らす。スポットライトの中で参道を降りていく。

妙子 いろんなお店がある。蛙の上に蛙、又、蛙。ケロケロ、可愛い。

憲子 人形供養。人形も、遊ぶだけ遊んでぼろぼろにして、ほってしまふんやのうて、こうして供養するんやねえ。

昭 なつかしい駄菓子があるなあ。甘い豆を砂糖で巻いたほうてん。これは、星の光や。小さい星の形したおかき。大きな揚げせんべえは、大丸奴言うんや。これなんや分かるか？

憲子 カルメラ焼き違いますの？

昭 わしらは、こたつ言うた。ほら、格好がよう似てるやろ。

妙子 お父ちゃんよう知ってるなあ。

憲子 駄菓子屋のぼんぼんやさかい。

昭 これで、大きしてもうたようなもんや。ほうてん一つもおか。

微かに、バイオリンの音。

昭 えっ。

憲子 何か？

昭 いいや、別に。チャンチキおけき聞きそびれたなあ。

上手にスポット。演歌師の衣装の平太郎、チャンチキおけきを弾く。

平太郎 あいた、又、顔弾いてもうた。

小さくチャンチキおけき。

妙子 あっ、大仏さんや。

昭 石切大仏か。前にはいたはらへんだと思う。立派なもんやなあ、手、合わしとこ。

(間)

憲子 耳ダレ、耳ナリ、人の数だけ病気もある。  
昭 洋服屋に八百屋、おもちゃ屋、漢方薬局、占い。  
神さんも一緒に住んだはるみたいや。

(間)

妙子 たこ焼き、お好み焼き、おうどんやさん、釜飯。

昭 お参りしてから、帰りに食べよ。どれにするか、妙子よう見とき。

憲子 うちは、七味こうて帰る。

昭、平太郎の方を振り返る。

昭 あの人ら、元気にしたはるやろか？ たった、一日の事やったけど。

憲子 え？

昭 いいや、なんもあらへん……。せやけど、二十年か……。ようしらんけど、お能の舞台では、ぽんと飛んだら百年が過ぎるらしい。それやったら、二十年は一足か……。

三人観客席に降りる。スポットライト

昭 なあ、妙子、人生って言葉分かるか？

妙子 うん、まあ……。

スポットライト一段と小さくなる。

妙子 そんなきつう手にぎらんでも、迷子にならん。

昭 妙子、人生で、もし迷子になったら……。

(間)

昭 道を教えてくれる人よりも、一緒に迷うてくれる人を探し。

スポットライト消える。バイオリン演歌が小さく流れる。

―幕―

引用文献 大道芸口上集（久保田尚 評伝社）

平成十年二月七日 一九九八年